



No.70

第12回 自分で作ろう!! 化石レプリカ -古生代「ウミサソリ」-

桜も満開に近づいてきた2004年3月27日, 地質標本館において恒例イベントの化石レプリカ作り体験学習会が催されました。今回のイベントで採用された化石は「ウミサソリ」です。「ウミ」と「サソリ」は知っているけど「ウミサソリ」って何? 参加者の多くは初めて耳にし, 目に触れる化石だったようです。

ウミサソリとは, 古生代オールドビス紀に出現し, ペルム紀末に絶滅した古生代を代表する節足動物きょうかくぶい 鋏角類の仲間です。ウミサソリは三葉虫から進化した生物であると考えられており, また現生のクモ類やサソリ類の祖先にあたるとも考えられています。現生動物の中では分類学上, 「生きている化石」のカブトガニにもっとも近縁だと言われています。体長は数cmから数十cmのものが多いのですが, 最盛期であるデボン紀には2mに達するものもいて, 地球史上最大の節足動物の一つにあげられます。

今回採用されたウミサソリ標本はアメリカ合衆国ニューヨーク州産で, 古生代シルル紀後期(およそ4億1千万年~4億2千万年前)の化石です(写真1)。このウミサソリは死後, 上に覆い被さった土砂などの重みで押しつぶされて, 立体感に欠ける平らな形になっていますが, 体節などの分離はなく完全形を保っており, なかなか良い標本でした。このウミサソリそのものの体長はおよそ13cmですが, ウミサソリを含む岩石も一緒にレプリカにしたので, レプリカ自体の大きさは縦16cm×横10cmになりました。

レプリカは, 本物の化石からとったビニルシリコン型に石膏を流し込んで, 本物そっくりに作成した模型です。地質標本館でレプリカ学習体験用に準備されたビニルシリコン型は, レプリカが研究素材としても十分に通用するものでありたいと, 丁寧に作成されたものです。レプリカではありますが, 「本物の良さ」を参加者に味わって頂けたら本望です。

イベント開催日は好天に恵まれ, オープンの9時半には既に20名ほどが列を作る盛況ぶりでした(写真2)。レプリカ作りを体験された方は200名で, 希望者全員に体験して頂くことができました。参加者の半数以上は今回のレプリカ作りが初めてということでしたが, その一方で, 1割の方々は5回以上作成経験のある「ベテラン」でした。参加者のほとんどは茨城県内在住の方で, 神奈川県, 東京都などの県外からの方々に混じって, はるばる大阪府からの参加者もいました。



写真1 アメリカ合衆国ニューヨーク州産シルル紀のウミサソリ化石の原標本 (*Eurypterus remipes* DE KAY; GSJ F16551)。体長はおよそ13cm, 標本サイズは21cm(長)×15cm(幅)。



写真2 イベント当日の開館時の様子。朝早くから大勢の方に来て頂きました。



写真3 レプリカ作成会場の様子。レプリカ作成用テーブルは6つ用意されました。各テーブルにはスタッフが一人ずつ配置され指導にあたります。窓際中央のテーブルではレプリカの型に流し込むための石膏と絵の具をといた色水が次々と用意されます。会場はかなりの熱気に包まれています。



写真4 石膏と色水をよく混ぜて、型に流し込んでいる参加者。粘性の高い液体が型の隅まで届くよう丁寧に流し込みます。

イベント当日はウミサソリに関連して、ウミサソリと分類学上近縁関係にある三葉虫の化石や、ウミサソリの子孫にあたる現生サソリの抜け殻が展示されました。また節足動物がもつ複眼の説明(三葉虫を実例として)や、その世界を体験してもらうコーナーも設置されました。様々な角度からウミサソリを理解して頂けたかと思えます。

今回のイベントは地質標本館側のスタッフ12名に加え、博物館実習生6名(千葉大学4名、茨城大学2名)の計18名が指導にあたりました(写真3, 4)。

アンケートをとりましたところ、参加者の多くは次回もレプリカ作りに参加したいと希望しており、このレプリカ作り体験学習会を通して化石に興味を持って頂いたことにうれしさを感じます。地質標本館のイベントとして化石レプリカ作りのほかにも、化石クリーニングをしたい、化石や鉱物の発掘をしたいなどの意見も挙がりました。皆様のご意見を基に地質標本館でも様々なイベントを考案していきたいと思っています。どうぞお楽しみに。

(井川敏恵, 利光誠一, 奥山康子, 坂野靖行, 中澤 努, 兼子尚知, 中島 礼, 松江千佐世, 谷田部信郎, 新津節子, 春名 誠, 青木正博)

**地質調査総合センター組織の再編
—地質調査情報センターの発足について**

平成16年8月1日に「地質調査情報センター」が発足します。このセンターは地質調査総合センター(Geological Survey of Japan)の中核というべき組織で、産総研発足以来、これまで成果普及部門(現広報部)所属の地質調査情報部と国際部門所属の国際地質協力室として、それぞれに活動してきた組織を統合したものです。より効率的に地質情報の整備、品質管理、流通、発信を行い、国内唯一の地質情報拠点として一層の機能充実を図ることを目指しております。Center of Centerとして、地質調査総合センターに所属する研究ユニットや地質標本館と連携して、国内外のニーズに一元的に対応できる窓口の役割を積極的に果たしてまいりたいと思います。

今後ともご指導、ご鞭撻をよろしく願います。

